議題１

平和教育について（報告）

１　“こどもピースサミット”について（指導第一課）

２　中学生による「伝えるHIROSHIMAプロジェクト」について（指導第二課）

平成２８年８月２５日
学校教育部指導第一課

“こどもピースサミット”について

１　目　的

“こどもピースサミット”は、各学校における平和ノートを活用した平和教育の取組等をもとに、平和についての作文募集や、「平和の歌声・意見発表会」等の開催、そして、「平和への誓い」の発信を通じ、次代を担う子どもたちに、平和についての意識の高揚を図ること目指している。

２　経　緯

“こどもピースサミット”は、平成７年の被爆５０周年記念事業「こども平和のつどい」の成果を引き継ぎ平成８年から実施しているもので、今年は２１回目である。

３　取組内容

(1)　各小学校の６年生児童による意見文作成

〈学校での取組〉

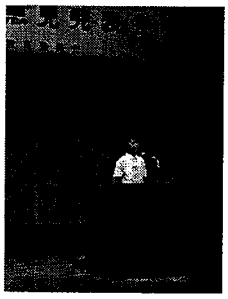
これまでの学校や家庭での学習や体験等を通して、平和の大切さについて感じたことや考えたこと、また、誰もが一人の人間として大切にされる学校や社会をつくっていくこと、さらには、国内外の人々と支え合い、つながりを広げ深めながら、平和な社会の実現を目指し共に生きていくことなどについて考え、自分の思いや願いをまとめた内容とする。

・　校数 141 校（市立の全小学校）　意見作文総数 10,622 点

(2)　こども代表20名の決定

・　各学校の校内審査を経て教育委員会へ提出された、意見文 390 点から２０点を選定

〈意見発表会〉



(3)　“こどもピースサミット2016”「平和の歌声・意見発表会」の開催（６／１１）

・　２０名の児童による意見発表会を実施し、ピースサミット大賞２名を選出
・　幟町小学校、吉島東小学校児童による平和の歌声発表
・　会場での感想や意見の交流

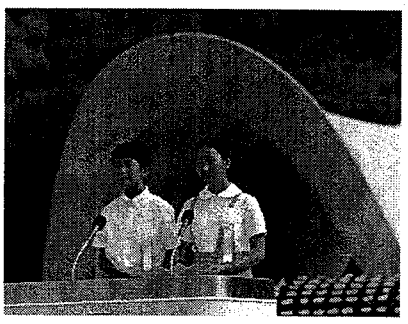
(4)　「平和への誓い」検討会議の開催（６／２５）

〈検討会議〉

・　こども代表２０名が、各学校での取組や発表した意見等をもとに、８月６日に発信する「平和への誓い」の内容について話し合い、原案を作成

(5)　平和記念式典（８／６）　こども代表2名が「平和への誓い」を世界へ発信

・　こども代表２名が、広島市内の小学校６年生の代表として世界へ発信
　平成２８年こども代表
　　竹屋小学校　　中奥　垂穂
　　亀山小学校　　青木　優太



４　報道実績

新聞記事：中国新聞、日本経済新聞、朝日新聞、毎日新聞
テレビ放映：広島テレビ

５　今後の予定

○　こども代表２０名の意見文集の作成
○　意見文を書いた小学校６年生全員に参加賞を贈呈

平和への誓い

「人が焼けるにおいがした」
「ある者は、肌が溶けて人間には見えんかった」
原子爆弾が落とされた広島の様子を、語り部の方は語ってくれました。
思い出したくない、胸が張り裂けそうだ。
被爆された人の辛さは、いつまでも、いつまでも終わることはありません。

被爆者の思いや被爆の事実を自らの体験のように、想像するのです。
聞きたくても、聞くことができなくなる日が近づいています。
一瞬で街がつぶれ、日常や夢を踏みにじられた
昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分の出来事を、
私たちは、もっと、知りたいのです。
もっと、伝えたいのです。

悲しみや苦しみを乗り越えた人々の努力によって、
広島は青く澄んだ空の下、色とりどりの花が咲く街に復興しました。
この広島に、今年も、世界各地から、多くの人が訪れています。
あの日の事実を知るために、平和記念公園を巡り、平和記念資料館を見学し、
語り部の方の話を聴き、原子爆弾の恐ろしさを実感しています。
そして、「あの日の出来事を伝える」と約束してくれた人たち、
平和の広がりを感じました。

私たちは、待っているだけではいけないのです。
誰が、平和な世界にするのでしょうか。
夢や希望にあふれた未来は、
ぼくたち、わたしたち、一人一人が創るのです。

私たちには、被爆者から託された声を伝える責任があるのです。
一人一人が、自分の言葉で、丁寧に、
戦争を知らない人へ　次の世代へ　世界の人々へ
命の尊さを　平和への願いを
私たちが語り伝えていきます。

平成２８年(２０１６年)８月６日

こども代表　広島市立竹屋小学校　　６年　中奥　垂穂
広島市立亀山小学校　　６年　青木　優太

Commitment to Peace

"I smelled burning bodies."
"People's skin had melted. They didn't even look human."
This is what atomic bomb survivors told us about Hiroshima right after the bombing.
It seemed like they didn't want to remember. It seemed like their hearts had been torn apart.
There will never, *ever* be an end to the pain of those who were bombed.

We imagine, as if they were our own experiences, the feelings of the *hibakusha* and what really happened on that day.
The time will soon come when, though we want to ask more, we will no longer be able to.
In an instant the city was destroyed, people's dreams and everyday lives crushed.
August 6, 1945, at 8:15 in the morning is something we want to know more about.
It's something we want to convey more.

It was the hard work of all who overcame their sorrow and pain that allowed Hiroshima to come back to life as a city of vibrantly colored flowers and clear, blue skies.
This is the Hiroshima that, year after year, countless people visit from all over the world.
To know what really happened, they explore Peace Memorial Park, go through Peace Memorial Museum, listen to atomic bomb survivors, and feel for themselves the terror of the atomic bombing.
Of those who come here, many promise "to convey what happened that day."
Because of all this, we feel peace is spreading.

We *cannot* simply wait.
Who will make this world peaceful?
The future, overflowing with hopes and dreams,
Is something that we, every single one of us, shape.

We have a duty to convey the *hibakusha's* words, which have been entrusted to us.
Each of us, in our own, deliberate words,
Will communicate and pass on
To those who do not know war, to members of the next generation, and to people around the world,
The treasure of life and the desire for peace.

August 6, 2016
Children's Representatives:
Tariho Nakaoku (6th grade, Hiroshima City Takeya Elementary School)
Yuta Aoki (6th grade, Hiroshima City Kameyama Elementary School)

平成２８年８月２５日
学校教育部指導第二課

中学生による「伝える　HIROSHIMA　プロジェクト」について

１　目　的

本市が進める平和ノートを活用した平和教育や英語教育の成果を生かし、中学生が広島を訪れる海外の人々に対して英語でメッセージを伝える活動を通して、平和への意識の高揚や英語力の向上を図るとともに、グローバル人材の育成につなげる。

２　経　緯

被爆７０周年記念事業として、昨年度より実施しており、２回目の本年度は、広島市内の中学校に通学する３年生２０名が８月６日を中心に、広島を訪れた海外の人々に対して英語で平和メッセージを伝えた。

３　取組内容

(1)　広島市内の中学校２年生徒を対象に平和メッセージを募集

＜メッセージの要件＞
① 被爆の実相等に関する内容を述べたもの
② 平和への願いや希望が述べられたもの
③ 平和の実現を世界の人々に広く呼びかけようとするもの

＜学校での取組＞

① 募集期間　平成 27 年 6 月 16 日(火)～平成 28 年 2 月 29 日(月)
② 応 募 数　メッセージ提出校数 46 校　作品総数 2,831 点
（市立中学校 44 校、修道中学校、ノートルダム清心中学校）
・校内審査を行い、各校２点以内の平和メッセージを教育委員会へ提出

(2)　メッセージ発信者（メッセンジャー）の決定

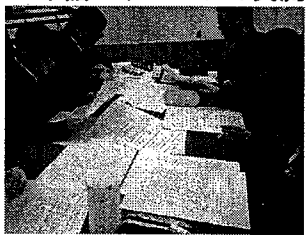
・教育委員会内で審査　提出作品数 74 点から 20 点を選定

(3)　メッセンジャー事前研修の実施（計５回）

・メッセンジャーの平和への認識を高めるとともに英語によるコミュニケーション能力の育成を図るため、20 時間の研修を実施

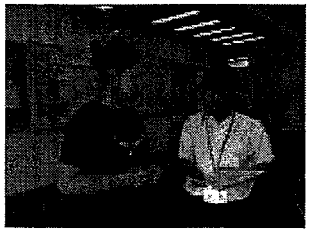
＜被爆体験伝承講話＞

＜日本語メッセージの交流＞



＜海外の人へのインタビュー＞

＜留学生とグループワーク＞



＜仲間との議論＞

＜英語メッセージの作成＞

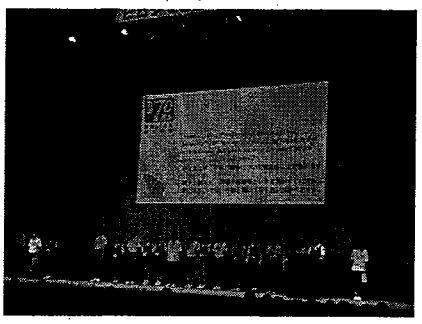
(4)　メッセージの発信

①　８月５日
・平和記念式典に参列する駐日大使等42名に、英語で平和メッセージを伝えた。
②　８月６日
・平和記念公園において、海外の人々に、英語で平和メッセージを伝えた。
・「ひろしま子ども平和の集い」において、英語と日本語で平和メッセージを伝えた。（平和推進課主管）

＜駐日大使等へのメッセージ発信＞

＜海外の人々へのメッセージ発信＞

＜ひろしま子ども平和の集いでのメッセージ発信＞



＜修了書授与＞

4　**報道実績**　　新 聞 記 事：中国新聞、読売新聞、日本経済新聞
テレビ放映：ＮＨＫ
ラジオ放送：ＮＨＫ

5　**今後の予定**

○　メッセージ集の作成・配布
○　平和メッセージを応募した生徒 60 名に参加賞を配布
○　平成 29 年度の募集
・募集期間　平成 28 年 5 月 24 日(火)～平成 29 年 2 月 28 日(火)（平成 29 年 3 月に 20 名を決定予定）

《参考》

① **アンケートについて（人数）**

	項　目	回　答　結　果
1	本プロジェクトに参加してよかったですか。	とてもよかった　（１９）　よかった　（1）
2	メッセンジャーになって、平和への意識が高まったと思いますか。	とても高まった　（１９）　高まった　（1）
3	メッセンジャーになって、英語で伝える力が身についたと思いますか。	とても身についた（１４）　身についた（6）

② **メッセンジャーの感想（一部抜粋）**

戦争のことを他人事だと捉えずに、「(戦争のことを）知って」、二度と繰り返してはいけないと伝えること、周りの人のギャップを認め合い、思いやりを持って接して身近な平和を作っていくことの大切さを学べました。
メッセージを発信するときは、伝えることはもちろん、自分で、これらのことを実践するように宣言しているような気持ちになりました。この気持ちをこれからも決して忘れず、平和のためにできることをしていこうと強く思いました。

最初は「平和」という大きなくくりの中で、自分達は何をしたらいいのか、どんなことをするのが平和なのか分かりませんでした。しかし、メッセンジャーになってみて、私には何ができるのか、考えるようになりました。身近なことでケンカをしないことや、自分と違う意見の人を尊敬できる勇気を持つこと等、私には小さなことしかできませんが、それをできる範囲でやってみようと思いました。

The 70th anniversary of the atomic bombing
Commemorative projects

Messages from Hiroshima's Middle School Students to People of the World

A Message for Peace

On May 27th, I was able to witness President Obama's historic visit to Hiroshima. He said,"We stand here in the middle of this city and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see." When I heard his speech, I thought he came here with courage to face atomic bomb tragedy and know the historical facts.

And I saw he hugged Mr.Mori, one of the Atomic Bomb survivors with my naked eyes. Even though they are living far apart in different countries, their hearts can become one. I realize it is important for us to have courage and act on it.

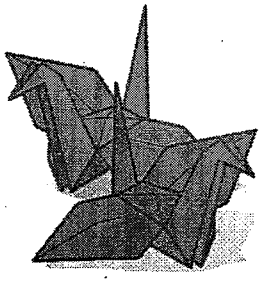
My grandmother experienced the Atomic bomb when she was an elementary school pupil. She said it was while she was going to school. Her teacher whom she was talking to few moments ago completely vanished. She also told me she ran to a city hall on the scorching soil to bring a rice ball. By hearing this, I thought we must not cause a war again that took my grandmother's happy childhood.

People across the world are still fighting today. So I really think we should not take our eyes off of wars. These people who live in refugee camps and those boys fighting civil wars are the same humans like us.

Each of us have hands. They are never for carrying weapons to hurt people. They are for turning pages and writing to discover the world.
So first, let us begin from getting to know someone who are close to us and what happened here in Hiroshima? With our actions, let's open the door to a peaceful world.

2016.August

Shimomura Megu



This sheet of paper is made from recycled paper cranes dedicated at the Children's Peace Monument in Peace Memorial Park.

Post your response to this message !

Hiroshima P2 Walker | Search

被爆70周年 被爆70周年記念事業

広島の中学生から世界の人々へのメッセージ

平和メッセージ

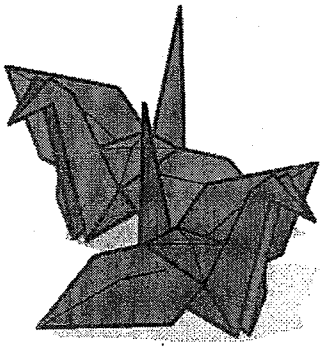
私は５月２７日、オバマ大統領の広島訪問で、献花式典に参加し、歴史的な日に立ち会うことができました。大統領は演説の中で、「私たちはこの街の中心に立ち、勇気を奮い起こして爆弾が投下された瞬間を想像します。」と語りました。私はこの言葉を聞いて、大統領は原爆と向き合い、歴史的事実を知る勇気を持ってきたのだと思いました。

さらに、被爆者の森さんと抱きあう姿を見て、離れた国で生活していても、１つのことで同じ気持ちになれるのだと分かりました。私は改めて、知る勇気を持ち、行動することの大切さを感じました。

私の祖母も小学生の時に被爆しました。学校に通っている途中で原爆が投下され、少し前に話していたはずの先生がいなくなったそうです。焦土の上を走って、市役所までおにぎりを取りに行ったとも語ってくれました。それを聞いて私は、祖母が過ごすはずだった楽しい子供時代を奪った戦争は、二度と起こしてはならないと思いました。

世界では、今でも毎日のように争いが起こっています。だから私は、戦争から目をそらさず知っていくことが大切だと思います。今、難民キャンプで生活している人たちも、内戦で銃を持ち、戦う少年も、私たちと同じ人間です。

私たちには手があります。これは決して、武器を持ち、人を傷つけるためのものではありません。本をめくり、字を書き、世界を知るためのものです。だからまずは、身近な誰かのことを、そしてヒロシマのことを、もっと知ることから始めませんか。私たちの行動で、平和な世界への扉を開きましょう。



平成28(2016)年8月

下村　めぐ

このメッセージカードは、平和記念公園の「原爆の子の像」に捧げられた折り鶴の再生紙を利用しています。